

# 住吉明神と白楽天

中世における翁の形象化をめぐる

金 賢 旭

金春禪竹は、猿楽者の翁信仰について集中的に書いており、春日明神・住吉明神・天満天神・地藏菩薩など、いろいろな神や仏が翁と結びつき、一体であることを説く。総合的に翁信仰を考える際には、禪竹の翁論も重要で、禪竹を中心におきながら翁猿楽が成立する背景としての翁信仰を考えている。特に、翁信仰は渡来系の秦氏の問題ともからめて考えなくてはいけない。八幡神・稻荷神などを含めて考えているが、今回、取り上げる住吉明神のケースは、古代から中世にかけての翁としての形象化のプロセスをもっとも良く資料的に残しているものとして注目される。

院政期ごろから中世にかけては、翁ブームとっていいほど、翁の形象をもつ神が多く現れ、翁神の信仰が厚くなる。これが翁猿楽の成立につながっていくのである。こういった翁の問題を考える際には神仏習合思想や、渡来系氏族の信仰、あるいは、神仙思想の問題など、多角的なアプローチが必要である。住吉明神は、『住吉大社神代記』には「美麗貌人（うるはしきひと）」として現れて軽皇子（かるのみこ）の歌に応答し、『伊勢物語』でも現行（げぎょう）して歌を返している。このような伝承には王権の守護神としての役割がよく示されている（多田一臣「須磨・明石巻の基底—住吉明神をめぐる—」『文学史上の源氏物語』至文堂、1998）といえると同時に、住吉明神が早くから和歌に関わる神とされてきたことがわかる。禪竹の翁論『明宿集』では、何よりも住吉明神を強く意識し、「和歌はこれ猿楽の命と尊むべし」といい、和歌の守護神である住吉明神を仰いでいる。

このように、和歌の神とされ、文学的要素がより濃厚な住吉明神が、翁として形象化される早い例が『赤染衛門集』にみえる。『赤染衛門集』（1041～1046成立?）には、

たのみては久しくなりぬ住吉のまづこのたびのしるしみせてよ  
千世へよとまだみどりごにありしよりただ住吉の松を祈りき  
かはらむといのる命は惜しからで別るとおもはん程ぞかなしき

奉りての夜、人の夢に、ひげいとしろき翁、このみてぐら三つながら  
とるとみて、おこたりにき。

とある。「たのみてはひさしくなりぬ」や「みどりごにありしよりただ住吉の松を祈りき」といった表現は、赤染衛門の住吉明神に対する信心が深かったことをよく表しているが、それゆえ、わが子を守りたいという切々たる願いが聞き入れられたのであろう。この三首の歌と左注は、住吉明神の和歌の神としての靈驗をもっともよく具現している一例であろうが、住吉明神が「ひげいとしろき翁」として人の夢に化現したとある左注は非常に興味深い。この歌三首は順序だけ変えて藤原清輔の『袋草紙』にも引かれ、もっと詳細な注がついているが、そこには、

これは、江拳周（たかちか）和泉の任を去りての後、重病に悩みて住吉の御崇有るの由なり。仍りてかの社に奉幣の時、三本の幣におのおの書く所の歌なり。その時、人の夢に、白髪の老翁社中より出で来てこの幣を取りて入り了んぬ。その後、病平愈すと云々。

とある。この注によると、赤染衛門の子大江拳周が住吉神の崇による重病に悩み、赤染衛文が三本の幣に和歌を記して奉ったところ、ある人の夢に白髪の老翁が社中から出てきた。老翁はその幣をとって入ったが、その後病気も治ったという。ある人の夢にみえた白髪の老翁は『赤染衛門集』と同様、住吉明神の化現だったのであろう。この箇所は『十訓抄』にも引かれ、基本的な内容の骨子は、『赤染衛門集』、『袋草紙』などと変りないが、今までは夢を見る主体が特定されていない「人」だったのに対し、「かの社に奉りたりければ、その夜

の夢に」と、赤染衛門が夢をみたような書き方をしている。ここでは、住吉明神が白髪の老翁としてある「人」の夢に化現したという伝承が、赤染衛門の夢としてすりかえられている。歌人自らが夢想するという話の発生は、和歌の守護神への尊崇の念が強まるなかでは自然な成り行きであっただろう。後でふれることになる、柿本人丸や白楽天の場合も、霊夢をこうむるという伝承が書き残されているが、ここには神仏の世界の夢想感得という共通の通念がはたらいているのである。

さて、このように、翁の姿をとって現れた住吉明神の伝承は、古今和歌集の注釈の世界にも受け継がれるわけで、たとえば、資料としてあげた『古今和歌集序聞書』に翁として現れた住吉明神が問答をする例をはじめ、和歌の秘伝書のなかでは翁の住吉明神が大いに活躍している。その一方、同じく『古今和歌集序聞書』のなかには、住吉明神が赤衣の童子として現れる。このように、中世における住吉明神は、翁の姿だけでなく、「赤衣の童子」として出現するという、錯綜する思想のなかで語られる。これは、住吉明神が翁と童子という互換性を持っていることを示唆するが、翁神の由来をたどる際にはこういった翁と童子がもつ老いと若さという身体の両義性の問題を合わせて考えていかなければならないだろう。

さて、住吉明神が翁の形象をもつようになる要因として、踏まえておくべきことがある。それは、塩土老翁や古海人老父といった住吉信仰の圏内で活躍する翁伝承である。『記紀』に見られる塩土老翁の例の一部分を資料としてのせた。これは、海幸・山幸説話の中で語られる塩土老翁の話で、海宮を案内しているが、この他にも天皇によい国、よい場所を教える。塩土翁が海の交通を支配しているのである。このような航海に深く関わった塩土老翁を住吉明神と一体だとする見解（梅園惟朝『松葉大記』、田中卓『神社と祭祀』）もあるように、両方には海神信仰として類似性があり、無縁のものには思われえない。少なくとも翁姿の住吉明神には、このような古代の塩土老翁の記憶が残されていたのではないだろうか。禅竹の『明宿集』においても、翁の妙躰として住吉明神が真

っ先に置かれ、それと位相を同じくする神として塩土老翁が直接に結びついてあげられるのである。

次に、古海人老人の伝承は、『住吉大社神代記』の「天平瓮を奉る本記」にみられる。この説話は、『日本書紀』の神武天皇即位前記のシヒネツヒコとオトウカシが老翁や老嫗に変装し、天香山（あまのかぐやま）の土をとりに行く話とも類似しているが、蓑笠を来て醜い翁に変装するシヒネツヒコの伝承がここにおいては古海人老父にとって変られたのであろう。そして、「あめのひらか」をもって住吉明神を奉ったとある。これも日本書紀でいう、天地の諸神を祭ったという話の変形であろうが、後文によると、古海人老夫は、住吉大社の末社である座間（いがしり）神社の祝人とある。『住吉大社神代記』によると、座間（一名、為婆照神、いばてりの神）神は、住吉大神の御魂だという託宣をするとあるが、このように住吉信仰圏内で語られる醜い翁の伝承も住吉明神の翁説の重要なファクターとして作用しているのではないだろうか。

それでは、住吉明神の翁説について、人丸と白楽天をからめて考えてみたい。『源氏物語』の「須磨」・「明石」巻の基底に流れる住吉信仰をめぐっては、今まで多く指摘されている。須磨・明石の巻には、明石入道をはじめ厚い住吉信仰が描かれ、物語化されていることが知られている。多田一臣氏が指摘するように、須磨巻の暴風雨は住吉明神の神異であり、それは住吉明神が荒人神と呼ばれたこととも無縁ではなく、その具体的な現れであろう。このような物語の本筋を支えるものとして住吉信仰が具現化されたもう一つの例が、明石入道が住吉明神の夢告を受け、船を仕立てて源氏を迎えに行く場面である。

明石を中心にした海岸帯には住吉信仰が流布していたとされるので、住吉信仰により触発された物語の展開を見せるのは、自然にも思われるが、もう一つ、この場面には、人丸のイメージが影を落としていると考えられるので注目したい。明石の浦より入道が船にのってやってくるという設定は、人丸の「ほのぼのとあかしの浦の朝霧に鳥隠れゆく船をしぞ思ふ（いま旅先にあって、ほのぼのと夜の明けるころ、明石の浦は朝霧に包まれているが、一艘の小舟が鳥

陰に隠れていくのを私はしみじみと眺めている)」という歌からヒントを得て語られているように思われる。平安時代以来、人々はこの歌を人丸の代表作だと思い込み、「ほのぼのとあかし…」という、人丸を思い浮かべていたようだが、住吉明神の守護というイメージと人丸のイメージが重なると同時に、人丸の歌の世界が具現化・物語化された部分だと思われるのである。また、明石巻には、源氏が明石の君へ送った歌に、「嘆きつつあかしのうらに朝霧の……」とあって、人丸の「ほのぼの……」の歌を下敷きにしているとされるが、このように、源氏物語の須磨・明石の巻には住吉明神と人丸のイメージがからんでくるのである。住吉明神と人丸の結びつきは、中世において一層強くなってきて、住吉明神・人丸一体説が作りあげられる。こういった構想の淵源が、すでに源氏物語「須磨・明石」巻にあったのではなかったのだろうか。古今注の秘伝書『玉伝深秘巻』（名古屋大学図書館本の最終丁に応永三十四年十二月日右二条家之御本写之）には、住吉明神が翁の姿をとって現れ、人丸の分身であることを告げる。つまり、住吉明神が人丸と一体化されるわけだが、住吉明神と人丸を結びつける際、住吉明神→翁→人丸というふうに翁が媒介者となるという点は、翁神の問題を考える上で興味深い。中世の開山縁起や神社縁起のなかでも神仏が翁を媒介にして現れる場合はしばしばみられるのである。（たとえば、走湯山縁起、彦山流記の八幡大菩薩など）。

次に、『竹園抄』の「和歌講作法」の例をみると、右には人丸を左には住吉明神をかけるとあり、対になった住吉明神と人丸が和歌の守護神として仰がれていることがわかる。人丸が和歌の神として神格化される過程においては、院政期から中世にかけて盛況だった「人丸影供」がもつ意味は大きい。人丸影供は、万葉歌人柿本人丸の画像を掲げ、その前で人丸を仰ぐ儀式と歌会を行うというものである。藤原敦光（1063～1144）の『柿本影供記』には、元永元年（1118）六月十六日藤原顕季亭で人丸影供が行われたこと、当日は新しく図絵された人丸像が掲げられてあったことが書かれている。人丸影供は、これを初めとしているのであるが、その時掲げられた図絵は、六十歳あまりの人丸が烏

帽子をかぶり、直衣を着て、左手に紙を右手には筆を握っている絵であったという。続いて、この画像の前に花や供物を捧げ、人丸讃を講じた後、歌会へと、影供の様子が詳細に書かれる。山田昭全氏は、最初の人麿影供に出席したメンバーが一族であることに注目し、内的には顕季が歌道の長であることを公認し、外的には顕季を中心とする六条藤家という歌道家の誕生を告げるために、一種の象徴として人麿画像が作用していると指摘している。これは、御子左家の俊成が住吉明神や玉津島の神を和歌の守護神として積極的取り入れようとしていたのに対比される。さて、資料としてあげた『十訓抄』の「柿本人丸の影供」には、人丸絵像の由来をはっきりとのせている。平安中期の歌人藤原兼房（1001～1069）が柿本人麻呂のことを強く念じていたある夜、人麻呂の現れる夢をみた。夢が覚めてからその絵像を書かせ、常に拝礼していたが、ご利益があり、前よりはいい歌を詠めるようになったという。この時の人麻呂の絵像は白河院に渡され、鳥羽の宝蔵に納められていたが、藤原顕季（1055～1123）がこれを描き写して持っていた。後、ご本尊として奉り「人麻呂影供」が始まり、影供は長年欠かすことなく続けられた、とある。藤原兼房の夢中に現れた人麻呂は「年高き人」で、『柿本影供記』の記事と合わせて考えると、六十歳あまりの高齢ということになる。史実においては、人丸がなくなったのは四十代と推定されるという。

それでは、高齢の人丸像が書かれる由来はどこにあるのだろうか。大串純夫氏は、こういった人丸像の成立について、東寺山水屏風絵の中心人物が白楽天であると考え、いわゆる兼房夢想の人丸像の格好が酷似していることから、人丸像はこの屏風を下敷きにしたであろうと推定している（「人麿像の成立と東寺山水屏風」『美術研究』164）。白楽天が七十一歳の時、老人七人で尚齒会を開き、その様子を屏風絵として書かせたというのは、白氏文集にも見える、知られた話だが、その屏風はすぐ日本にも伝来したらしく、それを真似て日本初の漢詩尚齒会が開かれる。それが、『本朝文粹』「暮春南亜相（ほしゅんなんあしょう）の山荘の尚齒会の詩」の記事である。また、『古今著聞集』には藤原

清輔により承安二年（1172）に開かれる和歌の尚齒会に関する記録がのっている。また、清輔は『暮春白河尚齒会和歌ならび序』で「柿本の風を忘れがたみなり、いざや太源のあとを尋ねて」と書いており、人丸と白樂天が深く関わっていることがわかるが、清輔は、尚齒会と人丸影供どちらにおいても中心人物であり、彼の中に人丸と白樂天が同じ位相をもって共存しているということは、非常に面白い。人丸絵像が白樂天の尚齒会や神仙の世界に近い七隻屏風絵の描写をモデルに発生していることが、こういった資料を通じてわかる。こうみてくると、人丸が老人性を獲得するきっかけが白樂天と密接に関わっているというであろう。しかし、人丸が白樂天像を媒介にするだけで、老人と取って代われるということは唐突すぎるかも知れない。例えば、古今集に「みたりの翁」が出てくるが、みたりの翁は、後世の古今注のなかでは、みたりの翁の一人が人丸とされている。しかも、この翁の伝承はかなり前までさかのぼるかもしれない。そういったベースのうえで白樂天を媒介に人丸がはっきりとして翁として出てくるのであろう。

白樂天を含め中国の神仙的世界が平安文学に多大な影響を与えたことは、あらためていうまでもないが、特に、漢詩尚齒会の様子を書き留めた菅原是善と同じく、漢詩の黄金時代を過ぎた大江音人や都良香などの漢文学者の文化圏で神仙的なものへの関心が広まっていたことに注意しておきたい。音人により創始された大江家の家学（林陸郎「大江音人と菅原是善」）は、大江匡衡や大江匡房に継承されるのであるが、匡衡の『江吏部集』には「江家の江家たるは白樂天の恩なり」とあり、『白氏文集』を熟読し、多く感化をうけていたことがわかる。

平安朝前期宇多天皇の寛平年間（889～898）に成立した『日本国見在書目録』やその後の『通憲入道藏書目録』（1159）には、多くの道教関係の書が記されている。これらの道教関係の書は奈良朝から平安朝にかけて幾度かにわたって将来されたものであろうと推定され、宮廷や貴族、あるいは仏教関係の人々の間で広く読まれていた（中村璋八「日本の道教」『道教』平河出版社）。特に、

平安時代には『老子』がひろく読まれたが、それは、「平安貴族層が養生術への関心がことに高く、そうした観点からであった」（増尾信一郎「日本古代の知識層と『老子』」「古代文化の展開と道教」雄山閣）という。こういった状況下で、道教の最高神と位置付けられた老子やそれを含めた道教思想を当時の貴族層が積極的に受容していた様子が窺える。院政期にいたると、大江匡房により『本朝神仙伝』が編まれるが、当時の神仙的なものへの傾斜がダイレクトに反映されているものとして注目される。『本朝神仙伝』は、中国の仙人の伝記や仙術などを紹介した『抱朴子』や『神仙伝』などからヒントを得た本朝の神仙譚をまとめたものである。特に『本朝神仙伝』には、都良香が大峰で神仙になっていたことをのせるが、院政期の神仙的なものへの傾斜という背景化で、神仙文学にふれてきた漢学者自らが神仙になるという説が生まれるのは自然な成行きとも思われる。

最後に、能「白楽天」では、住吉明神と白楽天がコンビで登場する。「白楽天」は、日本の知恵を計ろうと渡来した白楽天と住吉明神が詩歌の応酬をする前場と、明神の神力により白楽天をみごとに唐土に帰す後場で構成されている。一般的に能はシテ中心のものであるが、シテの住吉明神とワキである白楽天の「両者の詞章は等質な印象さえ与える」（伊藤正義『謡曲集』）とされる。このことは、能の劇作法においては異例なことであろうが、シテとワキ双方に目を向けさせ、住吉明神と白楽天の位相が同等であることを語ってくれるのではないだろうか。この能は応永の外寇を踏まえて製作されたという解釈（天野文雄「《白楽天》と応永の外寇」『ZEAMI』1号）もあるが、こういった対外問題はもちろん、中世を通じて蓄積された住吉明神・人丸・白楽天という三者の結びつきという要因もあったのではないだろうか。

#### \* 討議要旨

加藤耀子氏は、ア「住吉大社神代記」の成立時期をどう考えるか、イ記紀の住吉関係記事には神主の津守氏の祖とされる竹内宿祢が出てくるがこれと翁の関係はどうか、ウ和歌三神の変容について何か考えがあるか、エ「白楽天」に出てくる住吉以外の神社（伊勢、石清水、賀茂、春日、四つの一宮）



についてはどうか、と尋ね、発表者は、いずれも大事な問題だが、まだ考えていない、アについて、今回の発表論旨には関わらないのではないか、と答えた。

スコット・スピーアーズ氏は、「蟻通」との共通性を感じるがどうか、と尋ね、発表者は、今のところ考えていない、と答えた。

堀川貴司氏は、白楽天と神仙思想の関係が明確ではないのではないか、と尋ね、発表者は、白楽天の行った尚齒会は神仙思想に基づいている、翁は神仙思想と結びついているので、白楽天と結びついたら、と答えた。

小峯和明氏（座長）は、中世日本における神仙思想についてはまだ研究が進んでいないので、それを進めれば今回の発表もより興味深いものになるだろう、とまとめた。